THE VINES

満身創痍のクレイグ・ニコルス。ヴァインズに明日はあるのか？

by
MASAKO KARASAWA

photography by
YUKO TORISU / TEPPEI (LIVE)

ステージの上で、ヴァインズの曲を演奏している、あいつらは一体誰なんだ?――5月19日、渋谷クアトロのフロアに立っていた数十分の間に私は、時にそんな怒りすら感じていた。デビューから数えて、実に2年という時間をかけてやっと実現した、ザ・ヴァインズの初来日公演は、誰一人として予想することが出来なかったほどの――恐らくは、“クレイグ・ニコルス以外のメンバー”ですら考えつかなかったほど――殺伐とした結果を迎えることになった。すでに、あの日から2ヵ月が経ち、その模様がどんなものだったのか、聞き及んでいる人も多いだろう。何より、あの場に居合わせた数百人にとっては、忘れたくても忘れられない、強烈な体験として残っているはずだ。ライヴ終了後、他媒体のライターや関係者、あるいは幾人かの友人に、何度も同じ質問をされた。「で、今日のライヴはどうだったわけ?」。これまで観てきたライヴと比べて今日のライヴは“良かった”のか、“悪かった”のか? そう、誰もがその判断すら迷うようなものだったのだ。

この日に起きたことを簡単に言ってしまえば、クレイグの過度の混乱と、バンド・メンバー、スタッフ、カメラマン、オーディエンス、その場にいた全ての人達に向けての過度の攻撃性が、この日のライヴをムチャクチャなものにしてしまったということだ。

「俺達、“イーヴル・タウン”をやり始めたんだ。でも、その時にクレイグが出だしを逃した。で、理由が何であれ……その時から、奴は“何でもやりたいことをやる権利”を振り回し出したんだよ」。パトリックが語っているのは、ライアン、そして自分がライヴの途中でステージから降りることになった、“きっかけ”に過ぎない。ステージの幕が上がった時には、すでにクレイグの様子は明らかに不安定だった。ギクシャクとした演奏で始まった一曲目“アウタザウェイ!”から、ヴォーカルの音程をキープするために片耳を押さえながら、「こんな酷い音しか出ない国は、初めてだ」と、ブツブツと文句を言い始める。続く“アムニージア”、“ライド”でも、ステージの上の演奏は一向にまとまる気配がない。というよりも、フロントに立つクレイグが、演奏にまったく集中出来ていないのだ。メンバーや、スタッフを見回しながら、苛ついた表情を浮かべるばかり。“ウィニング・デイズ”に至っては、最後のコーラスを歌うことを放棄すらした。「ドラッグをくれ」「俺はクソみたいな人間だけど、お前らもクソだ」「どうせ、俺の言ってることなんて、わかってないんだろ?」「帰りたきゃ、帰ればいい」「本当に、ここはクソみたいな国だな」――クレイグの口から発せられたMCは、そんなひたすらにオーディエンスを混乱させ、傷付けるようなものばかりだった。

敢えて、この日のハイライトと呼べるものがあるとすれば、それはメンバー3人が全員ステージから降りたために、予定外に披露された“ギヴ・アップ、ギヴ・アウト、ギヴ・イン”の、クレイグの弾き語りだろう。レコーディング音源とはまったく別物の怒りと苛立ち、そして彼のソングライターとしての才能が剥き出しとなった、その迫力に背筋が寒くなる瞬間だった。そして、もう一つ付け加えなければならないのは、その弾き語りに続いて演奏された“ゲット・フリー”だ。この時にも、出だしの直後にクレイグは演奏を中断している。恐らくは、“イーヴル・タウン”と同じ理由だろう。その時のクレイグの顔に浮かんだ「もう、どうでもいいや」的な笑みは、完全にライヴそのものを放棄しようとしていることを表していた。実際、彼は一度、抱えていたギターを床に置こうとしているのだから。しかし、その直後、会場のオーディエンスが“ゲット・フリー”を大合唱し始める――そう、この日のライヴが、奇跡的に最後まで行われたのは、この瞬間の、数百人の勇気があったからに他ならない。そして、その瞬間を除いて、この日、最後までステージに精彩が戻ることはなかった。音楽の渦に、コーラスの波に飲み込まれて、一瞬にして別世界へと導かれるような、そんな奇跡はただの一度として起きなかった。2年前、アメリカで初めて観た時も、正直、これほど酷くなかった。勿論、演奏力で言えば、現在とは比べ物にならないほど、当時の彼らは全員が下手クソだった。しかし、その技術的な稚拙さ、未熟さなど軽く吹き飛ばす凄まじいエネルギー、全てのオーディエンスを圧倒するような鬼気迫る迫力があった。しかし、この日、ステージに立つクレイグ・ニコルスは、ただ「こんなのは嫌だ! 嫌だ!!」と、子供じみた駄々をこねていただけだったのだから。

しかし、何故、それほどにクレイグ・ニコルスは混乱し、毒づかなければならなかったのか? それを確かめようにも、事前にオファーしていた取材は一方的にキャンセル。本誌に限らず、予定されていた十数本の取材を、クレイグはすべて拒否している。その代わりに、パトリックとヘイミッシュが、各媒体の取材に答えるという応急処置がなされ、実際、私も二人と20分間話をした。が、その内容はやはり欠席裁判的なものに過ぎず、「何故、こんなことになってしまったのか?」という根本の理由が明らかになるものではなかった。

ここから先に掲載する、クレイグの発言は非公式なもの――つまり、私が無理矢理につかまえ、個人対個人として交わした、数分間の会話からの抜粋だ。当然、クレイグ本人としては、これらの言葉を雑誌に掲載されることは、極めてアンフェアに感じるだろう。しかし、ここ日本でクレイグに何が起こっていたのかを伝えるには、この肉声を伝えるほか方法はない――そう決心した。

「ジェットとのツアー、行けなかったんだよね。ニューヨーク行きのチケットまで取ってたのに」と言うと、少しの沈黙を置いて出た答えは、「あのツアーは……クソだった。きっと観なくて良かったと思う」。

事実として、ジェット、リヴィング・エンドと共に全米を回った〈オージー・インヴェイジョン・ツアー〉は、ヴァインズにとって決していい結果を残すものではなかった。名目上はヴァインズのサポートだったジェットが、あのiPodのCM効果も手伝い、まさにアメリカでのブレイクを果たした時期に行われたツアーだったからだ。結果、多くの会場でサポートのジェットを観た後、ヴァインズを観ずして帰るオーディエンスが多数――という、バンドにしてみればつらい現実を見せつけられるツアーとなったのだ。しかも、自分達の2ndアルバム『ウィニング・デイズ』がリリースされた時期とも重なっていたにも関わらず、だ。

「でも、少し元気になってるみたいで良かった。東京の楽屋で会った後、ちょっと心配になってたから」「(笑)なんで?」「あの時もクレイグ、一人で楽屋に閉じこもってて落ち込んでるみたいだったし、“取材”で会うことも出来なかったから」――ここで突然にクレイグの表情が険しくなる。私は明らかに言葉の選び方を間違えたのだ。次の瞬間、堰を切ったように、クレイグがすごい勢いでまくしたてる。「だって、そもそも僕って人間は、椅子にふんぞり返ってタバコをふかしながら『(気取った口調で)音楽ってものは~』なんてしゃべるような奴じゃないんだよ! そんなことしたくないし、何よりも、今の僕には全然必要ないんだから。僕に必要なのは曲を作ること。とにかく、これまでよりももっといい曲を書かなきゃいけないんだ。もう、僕らは次の段階に進まなきゃいけない。全然、自分達のことで手いっぱいなんだよ。それに、それに……」。やや口ごもって続ける。「勿論、君と話をするのは楽しいと思うし、『スヌーザー』もすごくいい雰囲気の雑誌だってことはわかってる。でも、結局――僕には、日本語が読めない。何が書いてあるのか、僕は知ることが出来ないんだ」。

デビュー・アルバム『ハイリー・イヴォルヴド』のリリース時、世界中のメディアがヴァインズを新時代の寵児として祭り上げた。勿論、あのアルバムは、それだけの興奮を与え得る内容と価値があった。しかし、2nd『ウィニング・デイズ』で、特にイギリス、アメリカの各紙はその態度を一変、多くのレヴューには酷評が掲載される。その内容が果たして正しいか／正しくないかは、ここでは問題ではない。クレイグが言おうとしてるのは、メディアに翻弄されることへの疲弊と不信感に他ならない。そして、私も紛れもなく、その「メディアの人間」なのだ。気まずい沈黙が続く。

「……どうせ君も、僕のことをマッドだって思ってるんだろ?」――突然に、そんな言葉が飛び出してきた。は? 私、クレイグがマッドだなんて思ってないし、そんな風に思うことをされたこともないよ? 「でも、僕は知ってる。みんな、『あいつは頭がおかしい』って思ってるんだ」。

事実、この来日の数日間、クレイグはバンドの中で完全に孤立していた。一人ホテルの部屋に閉じこもり、ライヴ前のリハーサルにすら参加していない。ライヴ本番、移動の時以外には、他の3人とほとんど顔を合わせていなかった。私自身、スタッフ、メンバー、誰と話しても、「クレイグには近付かない方がいい。嫌な気分になることを言われるだけだから」と言われ続けた。そう、この来日に関わった全てのスタッフにとって、クレイグは「腫れ物」だった。勿論、それは彼自身が引き起こした結果だ。ただ、「僕は頭がおかしいと思われてる」としか、その寂しさを伝えることの出来ないクレイグが、どうにも悲しかった。

大阪での公演も終わり、オーストラリアへと戻る滞在最終日。もう私からかける言葉は見つからなかった。「元気でね、夏にまた会おうね」くらいの挨拶しか出てこない。その最後の最後、クレイグはようやく少しだけ気持ちをやわらげて、口を開いてくれた。「でも、信じてほしいんだ。僕は……そう、僕は僕なりに、日本に来ることを楽しみにしてたし、実際、すごく頑張ったんだ」。

「僕、すごく楽しみにしてたんだよ。ザ・ミュージックのメンバーからも、『日本は本当にグレイトなんだ』って聞いてた。街もグレイトだし、お客さんもグレイトなんだ、って。そう聞いて、僕も本当に楽しみだったんだ。でも、本当に彼らと同じように自分も楽しめるのかな、みんなが僕らを受け入れてくれるのかって不安もあった。日本に限らず……僕は初めての国に行くのって、本当にナーヴァスになってしまうんだ。で、実際に来てみたら、この国は……僕の想像を、完全に超えてた。街中が、これまでに一度も見たこともないものばかりで。で、本当に僕は混乱しちゃったんだ。完全にパニックになった。ホテルの部屋から出るのも恐いくらいに」。「でも、部屋でテレビを観ても日本語のプログラムばっかりで……僕にわかるのは、唯一CNNくらいで。そのCNNは、本当に悲惨なニュースばかりが流れてて――本当に、僕はどうすればいいのかわからなかった。街に出るのも恐いし、例え出たとしても、どこに何があるのかわからないし。気晴らしにスケートボードをしに行く公園の場所すら、僕は見つけられなかったんだ」。

これが、クレイグの語った言葉のすべてだ。最後の言葉に、恐らく「あまりに子供じみた言い訳だ」と思う人もいるだろう。事実、これは「子供じみた言い訳」なのだから。この言葉を聞いたからと言って、私自身、クレイグを、そして、今回の来日公演を擁護するつもりはない。しかし同時に、誰も共有することの出来なかった不安と孤独と葛藤が、彼の中に巻き起こっていたということも、もうひとつの絶対的な事実として受け止めておきたい。そして、彼がそんなナイーヴさ、危うさを抱えた人間だからこそ、ヴァインズの手に触れただけで壊れそうな不完全な美しさを持った音楽が、光と闇の間で揺れる白昼夢のような2ndアルバム『ウィニング・デイズ』が生まれたということも。

この来日公演からの2ヵ月間で、ヴァインズの活動はまったくの白紙に戻されることになった。来日直後のメルボルン公演では、またもステージの上で喧嘩が起こり、たった一曲でライヴを終了。その日のライヴを主宰していたラジオ局からの批難は当然のこと、当日撮影していたカメラマンへの暴行も伝えられている。その翌々日に予定されていた地元シドニーでの公演は、クレイグの体調不良を理由にキャンセルとなった。続く6月に入ってからも、30本以上に及ぶインキュバスとのアリーナ・ツアーを全てキャンセル、〈フジ・ロック・フェスティヴァル〉への出演も取り消された。そして、つい先日、この夏、彼らが人前に出る最後の可能性と思われていた〈レディング・フェスティヴァル〉もまた、同様にキャンセルとなった。全ての公演について発表されている公式のコメントは、「現在、彼らは、自分達が精神的／肉体的に直面している問題を解決する時間を必要としている」というものだ。「新しいアルバム・レコーディングに入るつもりらしい」という噂もあるが、この夏、パトリックは、地元の友人でもあるバンド＝ザ・ユースのツアーにサポートして参加することが発表されている。つまり、バンドとしては、完全に活動を休止するということだろう。そう、これ以上、書くことはない。ヴァインズの明日がどうなるのか――それは、まだ彼ら本人達ですらわからないのだから。 S

syrup 16g by YUKI KAWAMOTO

LIVE reviews

BANDITS, THE & THE ZUTONS @ THE BANDWAGON / 30 MAY. SHIBUYA CLUB QUATTRO & 31 MAY. SHINSAIBASHI CLUB QUATTRO
CICALA-MVTA / 8 MAY. HATSUDAI THE DOORS
CLUB SNOOZER / 4 JUNE. FUKUOKA AIR
DJ KRUSH, KAZUFUMI KODAMA, V∞REDOMS, THA BLUE HERB, TAKKYU ISHINO & FUMIYA TANAKA @ SATURN / 15 MAY. OSAKA DOME
FELIX DA HOUSECAT / 3 JUNE. NAGOYA OZON
GRAHAM COXON / 2 JUNE. CARDIFF ENGINE ROOMS
HUSKING BEE, THE HIGH-LOWS & SMORGAS @ ROLLING ROCK THUNDER 001 / 12 MAY. KAWASAKI CLUB CITTA'
KEIICHI SOKABE / 13 JUNE. TOWER RECORDS OITA
N.E.R.D / 26 MAY. ZEPP TOKYO
PHANTOM PLANET / 17 MAY. HARAJUKU ASTRO HALL & 19 MAY. SHINSAIBASHI DROP
QURULI / 3,4 JUNE ZEPP TOKYO, 9 JUNE. NANBA HATCH, 12 JUNE. ZEPP FUKUOKA & 18 JUNE. NIPPON BUDOHKAN
RADIOHEAD, THE RAPTURE & PIXIES @ COACHELLA VALLEY MUSIC AND ARTS FESTIVAL / 1 MAY. EMPIRE POLO FIELD INDIO CALIFORNIA
SEIKOU ITO, KUNIKAZU KATSUMATA & ITSUJI ITAO @ TORA NO MON / 18 JUNE. TV ASAHI
SUPERCAR / 7 MAY. NANBA HATCH & 22 MAY. SHIBUYA AX
SYRUP 16G / 28 MAY. NANBA HATCH, 30 MAY. SHIBUYA KOUKAIDOH &6 JUNE. FUKUOKA IMS HALL
VINES, THE / 19 MAY. SHIBUYA CLUB QUATTRO & 21 MAY. SHINSAIBASHI CLUB QUATTRO
ZAZEN BOYS / 14 MAY. ZEPP TOKYO

syrup 16g by TAKAYUKI OKADA & YUKI KAWAMOTO

1 MAY
COACHELLA VALLEY MUSIC AND ARTS FESTIVAL
［レディオヘッド、ザ・ラプチャー、ピクシーズほか］
カリフォルニア州インディオ
エンパイア・ポロ・フィールド

行ってきましたよ、はるばるアメリカまで。今年の面子は自分的にハンパなかったんですが（だって、ピクシーズ、レディオヘッドの並びだよ）、その中でもラプチャー。去年のサマソニに比べ、成長しまくってました。ピクシーズが“ホエア・イズ・マイ・マインド”をやってるのを聴きながら向かった先の会場はなかなかの混み具合。そして、みんなハイテンション。おい、ピクシーズ観ろよ！ DFA Tシャツを着ていたので声かけられまくりで、自分も超ハイテンション。踊りまくりました。でも、一番の目当てだった“ラヴ・イズ・オール”のシングル・ヴァージョンを聴くことが出来ず残念。昼間は暑くてほとんど出歩かず、日陰へ。でも、サヴァス・アンド・サヴァラスはやばかった。予想を遥かに上回るパフォーマンスで涙が……。この人達は生で観ることをオススメします。そして、僕は今、エヴァに恋した5秒後。

（船橋市／安井コウタロウ／20歳）

7 MAY
SUPERCAR［スーパーカー］
なんばHATCH

新しいアルバムは凄かったけど、自分の中で何となく熱が下がったスーパーカー。今日のライヴは見送ろうと思った矢先、七尾旅人の突然の参加（!）で、旅人好きの友達と共に当日券を買って観た。天使に釘付け。VJ宇川さんも最高!! 今までは棒立ちのお客さんがなんか嫌だったんだけど、それはもう別にいい気がした。ライヴ・バンドでもないし。でも、コーダイのドラムはかっくいー!!

（京都市／下川路咲子／25歳）

8 MAY
CICALA-MVTA［シカラムータ］
初台THE DOORS

ほぼ一年前に江古田で彼らを初めて観た時、新たな音楽との出会いに興奮した。そして3rd『GHOST CIRCUS』の発売記念となるこのライヴ。ほぼ全てのセットが新曲なのに、体が自然に動き出す。まさに「奇才集団」だ。太田惠資が欠けていても、そのアンサンブルは鉄壁ならぬ柔軟。素晴らしい。楽しい。しかしMCは著作権法の問題から世界情勢まで包み隠さず話していた。そう、「何をも拒絶しない音楽」がそこにはあった。“平和に生きる権利”、アルバート・アイラーのカヴァーは特に圧巻でした。

（三島市／田村周三／22歳）

12 MAY
ROLLING ROCK THUNDER 001
［ハスキング・ビー、ザ・ハイロウズ、スモーガスほか］
川崎CLUB CITTA'

会場に入って、まずびっくりしたのがフロアに客が入りきれてないこと。正直、客入れ過ぎ……。で、肝心のライヴはと言うと、あんまり覚えてない。初めて観たハスキング・ビーも微妙だった……。しかし、トリのハイロウズ!! キーボードが抜けてから初めて観たけど、これはこれでアリかもって思った。だって、初っぱな4曲連続で新曲っすよ。それから“青春”“ハスキー”と代表曲の連続。でも、欲を言わせてもらうと、あんまり聴いたことがないような曲（例えば“シェーン”とか）もやって欲しいなって思った。それと、今月号を見て思ったけど、ヒロトも40過ぎてんのに、ビースティーズがえらいおっさんに見えた。

（世田谷区／佐古勇気／20歳）

14 MAY
ZAZEN BOYS［ザゼン・ボーイズ］
ZEPP東京

実は私、向井によりもベースの日向さんのハイ・テンションぶりに目が行っていた。アート・スクール時代には淡々とベースを弾いているだけだった（と思う。あんま観たことないんで）彼。しかぁし、今回観た彼は手を振り上げて客を煽ったり、手拍子を叩いたり、そして何より終始笑顔であった。なんか嬉しくなった。ライヴ自体は勿論最高だった。アヒトと客の女子（20歳）とのデュエットには大いに笑ったし、アンコールで（ツェッペリンの）“移民の歌”のアホver.と“自問自答”のハンド・マイクver.をやってくれたのもいい感じだった。ただ、ナンバガにあった「殺す!!」みたいな感じが減ったのはちょい寂しい。まあ、これもアリでしょう。楽しかった。

（東京都／岡田渉／20歳）

15 MAY
SATURN
［DJクラッシュ、こだま和文、ボアダムス、
ザ・ブルーハーブ、石野卓球、田中フミヤほか］
大阪ドーム

行ってきました、大阪へ。ヒッチハイクで（←これだけでレヴュー出来そう）。輪っかになってる素敵な会場でした。まずはDJ拓栄 feat.MC CARDZ。変拍子のビートが面白くてもっと踊りたかったけど、とりあえず腹ごしらえとこれからの予定をチェック。そしていざDJクラッシュへ。とてもシリアスなビートだった。ゆっくりとゆっくりと上げていく。クラゲのVJとかを見てたら脳内麻薬がダラダラと分泌してくるような気がして、すごく良かった。その後のDJ KENTAROとこだま和文はイマイチ乗り切れなかったのが残念。DJクラッシュの後にはちょっとね……。そして、ボア!! これがヤバかった。この日のベスト!! 両手に灯を持った美しき野獣、EYE。灯をバババッと動かすとノイズの固まりが降ってきて……。何かを呼んでいるような、何かを送り出すような、そんな感じ。美しすぎて泣いてしまった。あまりに凄すぎて、田中フミヤ観るつもりだったのに通路でボケーっとしてしまう。そしてブルーハーブへ。ボスの言葉はいつも個人としての俺にビビって来る。魂が震えた!! 最後にクラナカで、最後の最後まで踊る。VJも止まって外も明るくなってきたけど、みんな笑顔で疲れ切った体で別れを惜しむように踊り続けた。

（佐賀市／山崎剛／23歳）

17 MAY
PHANTOM PLANET［ファントム・プラネット］
原宿アストロホール

もっと歌よりのライヴを想像していたので、割れっぱなしのギターの音&シャウトしっぱなしのヴォーカルにかなり面食らいました。演奏もハラハラもので……。メンバー電撃脱退の痛手をカヴァーしきれてなかったのかしらん。でも、パフォーマンスはとってもチャーミングでした。ありそうで案外お目にかかれない、衝動系ライヴ。向こう見ずなエネルギー大噴出。とくにアレックスはほとんどサル。ダイヴやスピーカー昇りは序の口、天上からぶら下がってウンテイ状態でフロアに分け入ったのは、あっぱれでした。ビューティフルな男の子がアホみたいに暴れるのって、いいよねー。予想は見事に裏切られたけど、痛快だったのですべてオッケー!!　（大阪府／金沢節美／37歳）

19 MAY
PHANTOM PLANET［ファントム・プラネット］
心斎橋DROP

ショッキングなほどお客さんは少なかったけど、メンバーはリラックス&ゴキゲンさんな様子。何がおかしいのか終止ニコニコ顔で、やや幼児体型が激ラヴリーなダレンとアレックスの掛け合いが微笑ましく、歌も音も調子良さげで、さらに楽しめました。印象的だったのだ、彼女に一方的に別れを告げられる曲“バイ・ザ・ベッド”。この情けなさすぎる歌を、あまりにも凄まじい壊れっぷりで演奏するもんだから、余計に切なくなって思わず泣いてしまった。アメリカの子達が、「彼らのショーは良いよー」と言ってたのが理解出来ました。上手くはないが、クセになるんだろうな。あ、フロアに降りてきたアレックスの抱き心地、かなりヨカッタです。（大阪府／金沢節美／37歳）

19 MAY
THE VINES［ザ・ヴァインズ］
渋谷クラブクアトロ

幸運にも大好きなヴァインズ、待望の初来日公演を観れることになった私はクアトロに足を運んだ。今まで、彼らのライヴ映像はテレビやパソコンの画面を通して観てきたけれど、生で観るのは初めてなので、「どんなライヴになるだろう」と心躍らせて開演を待つ。時計はとうに夜7時を回り、メンバーがステージに登場。「ほ、本物だー!」と思い、自分の目に映るヴァインズが本物であることを実感し、興奮! 1曲目は“アウタザウェイ!”。我を忘れてステージに釘付けになり、飛び跳ね、一緒に熱唱! 生ヴァインズが目の前にいることの嬉しさを感じているのも束の間、クレイグの機嫌が悪く、暴言を吐き出した。「これはまずい……」。場内もいやーな雰囲気になる。それに拍車をかけるようにクレイグは“イーヴル・タウン”で歌詞を歌うのではなく、暴言を発するのみ。いつ何が起こるかわからない状況にハラハラドキドキし、クレイグの精神状態を心配していると、パトリックが怒ってベースを投げ捨ててステージ裏に引っ込んでしまった。そして、徐々にライアンもヘイミッシュもステージから消え、クレイグの弾き語り状態に（この時の“ギヴ・アップ、ギヴ・アウト、ギヴ・イン”はステキだった）。「このライヴ、どうなるんだろう」と思っているとステージに三人が戻って来た。ここで“ゲット・フリー”！ 少し、いやーな空気も薄れ、まずまずのライヴになる。最後の“F.T.W.”では、みんな飛び跳ね、いちばん一体感が生まれていたように感じた。ステージを去る時のクレイグのニヤッとした笑顔

LIVE reviews

THE VINES by TEPPEI

とピース・サインを観て、「やっぱり、クレイグは憎めないヤツだなあ」と思った。今回のライヴは最悪のライヴだったと言う人も多いが、頭の中をプラス思考モードにすると、あんなにも暴言を吐かれるライヴはそうはないので、貴重な体験が出来たと思うことが出来る。それに、どんなライヴであれ、大好きなヴァインズのライヴを観れたことには感謝したい。次の来日公演は、彼らがベストな状態でライヴが出来ることを祈っている。期待してるよ、クレイグ!!!

(茨城県／赤木裕香／18歳)

19 MAY
THE VINES［ザ・ヴァインズ］
渋谷クラブクアトロ

1stを聴きまくった02年の夏から長かった初来日!! 〈マジック・ロック・アウト〉でキャンセルされるわ、初来日のハコは一日のみクアトロだわで涙、涙ハラハラ、ドキドキの毎日でしたが……うーん。あまりに『ハイリー・イヴォルヴド』にハマって期待しすぎてたのか、あれが本領ではないのか、クレイグ……ヒヤヒヤのライヴでした。ヴァインズを愛しているからこそ、ライヴ行かなきゃ良かったかも……なぁんて。でも、また来てね。まじでヘロヘロ、クレイグでした。

(杉並区／桑原葉子／18歳)

19 MAY
THE VINES［ザ・ヴァインズ］
渋谷クラブクアトロ

昨年の〈マジック・ロック・アウト〉のキャンセルにも懲りず、今回も通常のチケット代の三倍も払い、ライヴに参加しました。あまりにも不機嫌なクレイグ。暴言を吐きまくり、曲も無茶苦茶。ファンサイトでは“金返せ”的な書き込みが多かったみたいですが、僕は「これぞロック・スター!!」と思いました。客に媚びず、やりたい放題。ハラハラドキドキで、かつてないライヴ体験をしました。大好きな“ゲット・フリー”の前奏も二度も聴けたし。最高でした!! タナソウさんも見つけたし。白いシャツの上から乳首が……。

(埼玉県／大橋一範／28歳)

21 MAY
THE VINES［ザ・ヴァインズ］
心斎橋クラブクアトロ

まさに「圧巻!!」の一言でした!! とにかく凄まじかったです。二日前の東京が嘘のように感じられる程、観客との一体感を感じました。こんなにも我を忘れて必死になったライヴは、おそらく初めてだと思います。観客もバンドも、物凄いエナジーで、みんなの喉が潰れそうなぐらい叫びまくったり、合唱したりして、とにかくみんな必死でした!! クレイグも始終ゴキゲンで、よく笑ってたし、ギターでドラムを叩いたり、飛び跳ね三連発したりと、パフォーマンスも凄かったです。で、クレイグは昔の職人さんみたいな感じで、ひとつひとつの音のバランスを必死に探っている感じでした（なのですが、やはり上手くいっていないところがクレイグらしいというか……）。最初は「ファック」とか言って、気にしてたけど、みんな彼の勢いに流された感じで、このヴァイブが途切れることなく終わったのが何よりでした。よく言われている、「彼らのライヴは、良い時と悪い時の差がはっきりしている」というのを実感した二夜でした。こんなにスリリングなライヴをするバンドは彼ら以外にいないでしょうね!! またクアトロで観たいです。

(大阪府／麻原佳子／25歳)

21 MAY
THE VINES［ザ・ヴァインズ］
心斎橋クラブクアトロ

あの三人が大人しいバック・バンドから、恐ろしく控えめなメンバーくらいにはなっていた。一年半程前に観た時には、クレイグの隣にはずっとローディーがついていないといけないくらい、一曲ごと、もしくは曲の合間にまで機材をぶっ壊し、刹那的に終始イン・マイ・マインドだったのに今回はそんなピリピリ感は微塵もない。客が喜ぶから、わざとギターに危害を加えてみたりはしていたけど。機材の具合の悪さを逆手に取っておどけて見せたり、簡単めの英語でしゃべったり、ユーモアのあるトコを見せてくれた。ウケを狙っているのはバレバレなんだけど、そのあまりにスウィートな人柄を見せつけられると、騙されたフリして笑ってあげずにいられない。そんな感じ。愛しすぎ。けど、正直バラードはまだ全然下手っクソで、ムードも何もあったもんじゃないな!!

(神戸市／馬場寛子／25歳)

21 MAY
THE VINES［ザ・ヴァインズ］
心斎橋クラブクアトロ

目の前にヴァインズ（正確にはクレイグ）がいる興奮は長く続かず。モニターの不調に毒づき通しの彼が中途半端にギターを壊し始めた頃から私は急速に白けてしまい、後は冷めた目でぼんやり見つめるばかり。「ゴミ」だった。ま、ある意味、スペシャルな体験だったよな……。

(大阪市／金沢節美／37歳)

22 MAY
SUPERCAR［スーパーカー］
渋谷AX

〈HIGH BOOSTER 2003〉以来、半年振りのスーパーカーのライヴ。3月に姉の結婚式・披露宴に出席して以来、私の中では自分の披露宴で流したいBGMをあれやこれやと考えるのが、音楽を聴く時の密かな楽しみになっていましたが（笑）、「スーパーカーだったら“Lucky”、“My Girl”、“RECREATION”あたりが歌詞的にも曲的にもいいよなー」なんて思っていたら、見事に“Lucky”、“RECREATION”をやってくれました!! とくに“Lucky”はやってくれるとは思っていなかったので、ナカコーとミキちゃんの二人の歌い合いを間近で聴いて、「絶対にコレは使いたい大好きな曲だ!」と強く実感しました。スーパーカーってなぜか、愛、幸せが感じられるバンドだなと改めて思いました。実際に、これらの曲を流すのは何年後になるか、わからないけど、その時は報告したいと思います（笑）。

(江戸川区／角田歩／26歳)

26 MAY
N.E.R.D［N.E.R.D］
ZEPP東京

チケットがまだ残ってる!? 仕事は休み! この状況でじっとしていられるわけがなく、急遽、名古屋から東京へ夜行バスにて直行しました。

待ちくたびれて、ため息もついたところ現れたのは、意外にも小柄で少年のようだけど、フェロモン出しまくりのファレル。手にはダイヤの指輪と腕時計。「一体、何カラットあるの? ギラギラしすぎ!」などと突っ込んでしまったが、ライヴが始まったら、そんなものは目に入らない。1stアルバムからも何曲か演ってくれた。やはり“RUN TO THE SUN”～“STAY TOGETHER”での繋ぎは、気持ち良すぎる。「HEY! WE NEED STAY TOGETHER GIRL!」と一緒になって叫んだ。「前の人、耳、大丈夫だったかな?」と思うぐらい叫んだ。そして、待ってましたの“シー・ウォンツ・トゥ・ムーヴ”。ファレルのボイス・パーカッションからドラムへ繋いでいく。体が勝手に動きます。この妙な肩の動き——何だこれは? 地味な動きだけど、体中の血液がフツフツと煮えたぎっている感じ。興奮冷めやらぬまま帰りの夜行バスに乗り込む。ここまでに来たのだが、思わぬハプニングが!! 何とサービス・エリアで休憩して、バスに戻ろうとしたらバスがいない!! 何と置いてけぼりを喰らった。ふざけんなー!! 有り得ないよー!! 最悪な結末を迎えたのでした。でも幸せ♡

(三重県／堀田由利子／24歳)

28 MAY
syrup 16g［シロップ16g］
なんばHATCH

とにかく暗くて五十嵐氏の表情が全然見えませんでした。けども、逆に歌声に耳をすませたというか、歌に集中していられたような気が。“I・N・M”が良かったです。

(滋賀県／北野恵香／24歳)

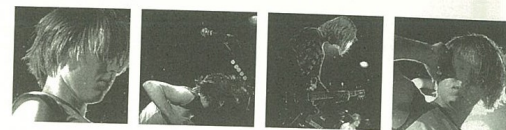
30 MAY
syrup 16g［シロップ16g］
渋谷公会堂

先行シングル“リアル”においての、「これからロックするだけじゃなくて、ロールもしていきますよ」といった姿勢に、もはや何でも出来る!と、感動してむちゃくちゃ期待した新作『Mouth to Mouse』では、「やっぱロールなんて出来ません、星とか月のこと歌います、終まいには、過去の君に対する愛がまだありますわ～、それが全てだったりします。グサグサはなしで、グダグダで、クドクドと」。それは、社会からは一千光年だったのが、一万光年離れてしまいながらも、徹底的にリアルを追求する五十嵐隆の姿に、今まで以上に愛情が湧きつつも、どこか物足りなさを感じた。これ以上の展開はないのかもな～とか、そんなしょうもないことも思った。 そんな中、迎えたこの日のライヴ、ギターはサポートに任せて、初っぱなから驚きのハンド・マイク!! それは、総合司会のエレカシ宮本にも、ナル全開のミスチル桜井にもなれない、どうにも五十嵐なのだが、「誰ですか、あんたは?（苦笑）」と、思わず笑ってしまった。が、やはり、アルバム同様、今ひとつ気分は乗らなかった。ロック・スターですかい?、みたいな……。五十嵐が離れてしまった気がした。まぁ、「“絶対これは買い”の絶対って何?」なんて、サービスだもんな～。まぁ、色々変わってくのは必然だよな～。とか、そんなこと思いながら、何度も聴いた名曲達がスッと過ぎていった。しかし、中盤“回送”から五十嵐もギターを持ち、4人編成で音圧もグンと上がり、今まで足りなかったものを一気に解き放った。「ネズミは、ブラウン管にはいらねぇだろ」みたいな、逆ギレ感も出して（ちょい妄想）。そう、媚びを売るのは半分でいい、後は自分らの好きにやる。その証拠か、「カッコイイ!」かなんかの声援に、「うるさいよ」と普通に応える。いい。やっぱり、どこまで行ってもこの男は最高だった。より好きになってる自分がいた。この先もシロップは、この日のライヴのように、オーディエンスとのバランスを絶妙に取っていくのだろう。終わった頃にはもう、別に、ロールしてかなくてもいいやと思った（苦笑）。それだけが大切なことではないし、ロールしなくてもこんな素晴らしいバンドは、シロップぐらいしかいないしね。そして、とりあえずこの日で、一区切りがついたことは確か（なはず）だ。これからもより一層、期待されるだろうし、しょうもない批評も飛び交うだろう。でも僕は、どっかの雑誌みたいに、「良くなってきてる、7点」とか、「もっと大きな所で観たい」とか、あと、お決まりの「頑張ってください」とか（直接本人に会った時、ふいに言っちゃった事ありましたが……信用ならねー!（苦笑））は、言わない。ただただ、感謝したい。いてくれるだけで、それだけで、本当に嬉しい。うん、シロップの音楽と、五十嵐隆という人間と、あと、五十嵐を支える他のメンバーも当然愛してます、本気で……。なんちゃって（苦笑）。

(浦安市／梅沢航平／20歳)

30 MAY
THE BANDWAGON
［ザ・バンディッツ、ザ・ズートンズ］
渋谷クラブクアトロ

「コーラル十男気ロケンロー＝バンディッツ、コーラル十ゾンビ・ソウル＝ズートンズでしょ?」、「リヴァプール音頭をユル～く踊ればいいや」くらいの気持ちで行ったんですが、初来日なのに客が熱い! フーリガンらしき一団までいて、私も二列目でワクワク開演を待ちつつ、周りの人の会話を聞いていると、メディアの煽りも受けてか、やっぱりズートンズに対する期待度が高いみたい。うーん、今回私は男気バンディッツ観たさで来たんだけどなぁ……なんて思っているうちに、ズートンズ登場、キックオフ! 一曲目“ズートン・フィーヴァー”からすでに大爆発で、例の「アウ、ウ、ウ」も大合唱。ソロになると男女問わずの大歓声が上がった、ガニ股のサックス嬢も美人だったけど、どうもいろんな所から盗んできた音楽を“自分達の音”として消化しきれてない気がするなぁ。「あのサックス嬢がもっさいスカリー野郎だったら、これほど人気出るのか?」とか思っちゃったりして。

で、男気バンディッツ!! 演歌歌手みたいな顔して歌うヴォーカルといい、腹プニプニしてるのに脱いじゃうドラムくんといい、あのコーラルとはまた違ったギャング団的たたずまいが最高ですね! 弾き語りあり、クラッシュのレゲエ・カヴァーありで、彼らは確かに若手リヴァプール勢の裏ボスにふさわしい風格を持ち合わせていました。そして、シメは“2ステップ・ロック”!! 出た!!! ステップ踏みまくり、合唱、大合唱、ジャンプジャンプで、リヴァプール祭はお開きとなりました。友人は「ズートンズ良かったー」って言ってたけど、私としてはベタ・ロック＝バンディッツが、さらに好きになった一夜でした。VIVA、リヴァプール! あんたら、DNAから違うよ!!!!

(神奈川県／山口詩織／17歳)

30 MAY
THE BANDWAGON
［ザ・バンディッツ、ザ・ズートンズ］
渋谷クラブクアトロ

CDより全然良いズートンズ。リズム隊が「ハゥフッフッ」にも大満足。続くバンディッツは「リード・ギターを首にしろ!!」と思いつつも、ベースの人の顔（とくにコーラス時）で、まあまあ楽しめました。ラスト二曲は良かった。ライヴが良すぎたズートンズのCDじゃ聴く気にならないけど、バンディッツは聴いてみようと思いつつ、やっとブリティッシュ・シー・パワーを買って帰りました。今年は続々と良いCDが出てきますね。オーディナリー・ボーイズなんて泣きそうです。

(茨城県／堀さくら／29歳)

31 MAY
THE BANDWAGON
［ザ・バンディッツ、ザ・ズートンズ］
心斎橋クラブクアトロ

普通なら手を出さない種類の音だけど、面白そう! と直感一発。これが大正解で、すごく楽しめました。特にザ・ズートンズは、これぞライヴ・バンドというのかしら、「ここはイギリスのパブか?」の雰囲気ぷんぷん（行ったことないけど）。有無を言わせず周りをどんどん巻き込んで行くパワフルさは、雑多な音楽性に出てますね。後ろで控えめに観ていたはずが、いつの間にか前列で髪を振り乱していました。終わってから会社に戻って仕事したけど、頭ピロローンで使いもんにならなかったです。(大阪市／金沢節美／37歳)

2 JUNE
GRAHAM COXON［グレアム・コクソン］
カーディフENGINE ROOMS

ウェールズはカーディフでのグレアム・コクソンのライヴに行ってきました。入り待ちして、サインしてもらうことが出来ただけでも、天にも昇るテンションだったのに、ステージの目の前のポジションで見ることが出来ました。ブラーって言うよりも彼の内省的な歌詞とか、グイグイ来るギターが好みな僕は、生で観るのはこれが初めて。恥ずかしそうにステージに登場すると、一言挨拶した後、おなじみのテレキャスターを握ってスタートは“エスケープ・ソング”。眼鏡を取って、にこっと笑って二曲目“スペクタキュラー”。やっぱりギターすげえ上手いです。本当に気持ちよく決めていくリフとカッティング。足首ぐりぐり回しながらひねり出すように弾くソロとカオティックなノイズ。見たところシンプルな機材しかないのに、かなりバラエティに富む音を出していました。うるさくちゃちゃを入れてくる客を「BUZZY BUZZY BUZZY」と軽くあしらって、すごく演奏を楽しんでいるようでした。アンコール1曲目に、僕の大好きな“ビター・ティアーズ”を、ぼそっとやってくれて、“フー・ザ・ファック?”の最後の開脚ジャンプでショーは終了。でも、もう一回ステージに出てきてお客さんと握手しながらライヴ・ハウスを縦断して帰って行きました。初めて観た彼の、ギターを弾きながら歌っている時の真剣な目つきは、なんで僕がこんなに彼の曲（インタヴューも）に惹かれるのか、確信を得たような気がしました。ちなみに、フロント・アクトの女の人のサポートで、ヴァーヴのサイモンがベースを弾いていましたよ。

(匿名希望／22歳)

3 JUNE
FELIX DA HOUSECAT
［フェリックス・ダ・ハウスキャット］
名古屋OZON

登場初っぱなにトーキング・ヘッズの“ワンス・イン・ア・ライフタイム”を流し、ブラーの“ガールズ&ボーイズ”も流していた。クラブとか関係なく、歌って盛り上がりまくった。次の日に仕事があったので2時間ぐらいしかいなかったが、十分に楽しめた。もちろん最後までいたかったけどね～!!

(愛知県／尾崎博史／22歳)

3,4 JUNE
QURULI［くるり］
ZEPP東京

くるりのライヴに、2日間参加させていただきました。なんてロックな、いや、ロックンロールなステージでしょう!! リアルタイムでずっと聴き続けてきたくるりの、新しい魅力を見つけてしまいました。ライヴ中、素晴らしいステージを見せてくれるメンバー皆さんの道のりが、ふっと頭をよぎり……またグッと来るものがありました。“HOW TO GO”の「毎日は過ぎてく／でも僕は君の味方だよ」のラインが示す通り、僕は20年後も60年後も、くるりのファンです。つらいことがあっても、それを見せない人間がいちばん強い人間です。そんなくるりに一生ついてくよ!!

(埼玉県／大野雅也／21歳)

4 JUNE
CLUB SNOOZER［クラブ・スヌーザー］
福岡AIR

福岡でのクラブ・スヌーザー史上最高の盛り上がりを見せた、今回のクラブ・スヌーザー。初顔見せの玉井さんもビシバシ決めてくれました。およそ1時間で“スメルズ・ライク～”や“ワンダーフォーゲル”が流れるという予想外の流れに、みんなはしゃぎまくって、女の子も汗だくで頑張ってた。そんな中、突然“ヘルニアの人”が「今日は朝6時か7時まで、やれたらやりましょう!!」なんて口にするから、倒れるくらいに踊っちゃいました。でも、音楽にまつわる話や態度を真剣にしている“ヘルニアの人”は、とってもかっこ良かったです。

(福岡県／松崎洋／27歳)

6 JUNE
syrup 16g［シロップ16g］
福岡イムズホール

今回はサポート・ギタリストを含めた4人での等イヴでした。予想としては、五十嵐氏が40万のアコギ購入→レコーディング使用→ライヴにも使用→三人じゃ無理→サポート・ギタリスト、といった流れだと思いました。単純に音圧が増して迫力がありました。お客さんは前半おとなしかったのが、後半にアップ・テンポな曲が増えると、ガッツポーズが増えていました。三回目のアンコール“落堕”では、五十嵐氏は、パペットマペットではないですが、左手にお猿のぬい